

『論考』の「対象」と色排除問題

大伴 慎吾

0. はじめに

0-1. 結論と概要

本論文は、『論考』⁽¹⁾において、いわゆる色排除問題が、対象を現象（直接経験、センスデータ）とみなす見解⁽²⁾にとって何ら脅威とならないことを示すことによって、この見解を擁護するものである。対象を現象とみなす立場に立つと、要素命題の相互独立性⁽³⁾と色の両立不可能性⁽⁴⁾が衝突してしまう、という色排除問題に対して、いくつかの巧妙な解決案が出されている。本論文では、そのうち特に有名なヒンティッカ夫妻の解決を検討した上で、それが『論考』のウィトゲンシュタインに帰属させられないと批判する。その上で、色排除問題は、『論考』のウィトゲンシュタインに「矛盾」概念について混乱があったために、当時の彼には問題とされておらず、そもそも解決されるべき問題ではない、という結論を採る（いわゆる「解消」されるべき問題である）。このような「解消」は華麗な解決に比べれば魅力的ではないが、対象＝現象説を擁護するには有用であろう。のみならず、ウィトゲンシュタインがなぜ『論考』の立場を捨てたかを考えるうえでも、有意味である、と考える。

0-2. 前提となる議論

本論文は色排除問題を巡る考察であるが、まず、前提となる議論を確認しておく。

『論考』において、「対象 [Gegenstand, object]」は重要な概念である。名は対象を名指す。名の結合は要素命題であり、対象の結合は事態である。両者の配置が対応することにより、要素命題は事態を写像する。複合命題は要素命題の真理関数なので、複合的事態も記述できる。このようにして、言語が世界を語りうるようになるから、世界の側の基礎的構成要素である対象は、『論考』の意味論的・存在論的基礎単位である。このような対象とは何か、当然問題となる。

しかし、対象とは何か、『論考』は明示的に語ってはいない。

そのため、対象とは何か、について、様々な議論がなされてきた。典型化すれば、ウィトゲンシュタインは対象とは何か、決めていなかった。対象は個体である。対象は性質、

関係も含む。以上の3つの立場が挙げられる。

最後の立場には、さらに進んで対象は現象、直接経験、ないしセンスデータである、とする立場がある。本論文が擁護するのは、この立場である。

ここで、問題点がいくつかある。そもそもウィトゲンシュタインは対象が何であるか決めていなかったのではないか。対象の存続性⁽⁵⁾とセンスデータの「つかのま」性が衝突するのではないか。そして、色の両立不可能性と要素命題の相互独立性が衝突するのではないか、という、いわゆる色排除問題である。

本論文では、紙幅の関係から第3の問題のみを取り上げる。解決困難であるように思われるのみならず、ウィトゲンシュタインの『論考』からの離脱に関係していると考えられるからである。要旨としては、アンスコムによって呈示された問題点を確認し、ヒンティッカ夫妻の巧妙な解決法と、その難点を指摘したうえで、私見による素朴な解決——というよりは、問題の「解消」を試みる。

本論文の主なテーマは、右の点にあるので、第1、第2の問題点については、他日の機会に譲る。

他方、対象が、現象であるかについては、本論文の不可欠の前提であるから、ごく簡単に論拠を挙げる。

まず、対象を現象、直接経験と考える以上、個体のみでなく、関係や性質も、対象でなければならぬ。しばしば引用される箇所であるが、ウィトゲンシュタインは『草稿』において、はっきりと言っている。

関係、性質などもまた、対象である⁽⁶⁾。

また、『論考』においても、要素命題について論じた箇所で、その主張をほのめかしている。

経験的実在 [Die empirische Realität] は、対象の総体によって限界づけられている。限界は再び、要素命題の総体のうちに示されている⁽⁷⁾。

さらに、『考察』冒頭の節には、以下のような箇所がある。

現象言語、あるいは、私の名づけたところでは「1次言語」は、今は、目標として私の念頭に浮かんでいない⁽⁸⁾。

『考察』は 1929 年、ウィトゲンシュタインがケンブリッジに復帰した年に書きはじめられた⁽⁹⁾から、「現象言語」が、『論考』における論理的に完全に分析された言語を意味する蓋然性は高い。もしそうなら、『論考』の対象は、現象ということになる。

以上、『論考』の過去、現在、未来のいずれの資料からも、『論考』の対象を現象、直接経験とみなす根拠が見出せる。

1. 色排除問題がなぜ問題になるのか

1-1. アンスコム批判

色排除問題の出発点は、アンスコム批判である⁽¹⁰⁾。

アンスコムは、当時の「『論考』の最も一般的な見方」の典型例として、ポパーを引用する。「ポパーによれば、『論考』の要素命題は単純な観察命題である」。そして、「ここに赤い斑点 [Red patch here]」のような命題において、「赤い」という語が指示する対象と、発話者は見知りをもつであろう。右の命題は、単純な観察言明の候補といえる。とすると、「要素命題は、単に観察命題であるだけでなく、センスデータ命題である」⁽¹¹⁾。

このような見解に対して、アンスコムは、テキスト上の根拠に乏しいことに加えて、以下のような批判を加える。

第二に、最も容易に心に浮かぶような例、「これは赤い斑点だ [This is a red patch]」は、『論考』によれば要素命題ではないと証明されうる。というのは、6.3751 において、括弧の中に「次のような部分が」あるからだ。「二つの要素命題の論理積がトートロジーでも要素命題でもありえないことは、明らかである。視野における一点が同時に二つの異なった色をもつという言明は、矛盾である」。ここから直ちに、「これは赤い斑点だ」は要素命題ではありえない、ということが帰結する⁽¹²⁾。

1-2. 問題点の呈示

アンスコム批判はいささか簡潔にすぎるので、もう少し丁寧に見ていく。問題点はこうである。

① 要素命題は相互独立である。つまり、要素命題は、互いにその真理値に影響を与えない。例えば、要素命題 p が真であるからといって、別の要素命題 q が真になるか偽になるか決定されるわけではない。したがって、「 $p \wedge q$ 」は、トートロジーにも矛盾にもならない。

要素命題の相互独立性は、4.211「要素命題の目印は、いかなる要素命題もそれと矛盾しえない、ということである」と5.134「要素命題からは、他のいかなる要素命題も推論されない」に示されている。

② 他方、色命題は両立不可能である。つまり、6.3751 括弧書きにあるように、「視野における一点が同時に二つの異なった色をもつ、という言明は、矛盾である」。

以上2つが前提となる。

さて、視野における一点が同時に二つの異なった色をもつという言明の例として、「この斑点は赤く、かつ、緑だ」を考える。「この斑点は赤い」「この斑点は緑だ」を、それぞれ $R(a)$ 、 $G(a)$ とする。 $R(a)$ 、 $G(a)$ が要素命題であるならば、「この斑点は赤く、かつ、緑だ」は、

$$R(a) \wedge G(a)$$

と書ける。

ここで、①要素命題の相互独立性により、 $R(a) \wedge G(a)$ は矛盾ではない。

ところが、これは②色の両立不可能性すなわち、 $R(a) \wedge G(a)$ は矛盾である、というウィトゲンシュタインの見解に反する。

したがって、 $R(a)$ 、 $G(a)$ は、要素命題でない。

「この斑点は赤い」「この斑点は緑だ」はもちろん、典型的なセンスデータ命題であり、センスデータ命題は要素命題ではないことになる。対象はセンスデータ等々の、直接経験、現象ではない。

アンスコム批判は、実にもっともであり、しかも対象を現象と捉える立場にとって致命的である。日常言語においては、アンスコム批判の指摘する問題点は避けられない。アンスコム批判をかわす解決は、分析された、論理的に完全な言語においては、そのような問題点は生じない、とするしかないであろう。では、具体的にどのような解決があるのか。以下に、ヒンティッカの有名な解決と、その解決の妥当性を検討し、その上で私見を述べる。

2. ヒンティッカの解決

2-1. 「アンスコム批判の誤った想定」と色関数による解決

アンスコム批判に対し、ヒンティッカは次のように述べて、対象を現象とする立場を擁護する。

アンスコムによって例示された一般的タイプの議論は、それらの細部がどれほど練り

上げられていたとしても、ウィトゲンシュタインによって受け入れられていない重要な前提に依存している。……反対論は、実のところ、自然言語の命題「この斑点は赤い」と（同じ斑点を指して）「この斑点は緑だ」が両立不可能である、というだけでなく、それらが、正しい表記法 [correct notation] において、「R(a)」や「G(a)」のうなものとして表されるような、主語―述語命題である、と想定しているのである⁽¹³⁾。

すなわち、ヒンティッカによれば、アンスコムは、①②の前提に加えて、③「この斑点は赤い」など自然言語の命題は、R(a)のような主語―述語命題である、との想定をしてしまっている。6.3751 から、このような想定が導かれるわけではない。

アンスコムの想定が間違っているとすれば、「この斑点は赤い」等はどのように分析されるべきか。ヒンティッカとしては、「この斑点は赤く、かつ、緑である」が矛盾となるような、「この斑点は赤い」の表記法を与える必要がある。

例えば、われわれは、思考実験として、こう想定できるかもしれない。色の一般概念が言語において表されうるのは、色述語のクラスによってではなく、視野の点を色空間へと写像する [mapping] 関数 c によってである、と⁽¹⁴⁾。

具体的には、

「この斑点は赤い」： $c(a) = r$

「この斑点は緑だ」： $c(a) = g$

と表現する。 $c(a) = r$ 、等は「この斑点は赤い」等の論理形式であり、 r 、 g は対象である赤や緑である。

関数は、同じ 1 つの変項 [argument] に対して、異なる 2 つの値を取りえないから、関数 $c(x)$ は、定項 a に対して、 r と g という二つの値を取りえない。しかも、右の関数の性質から論理的に（「論理形式のゆえに」⁽¹⁵⁾）取りえない。したがって、「2 つの命題は論理的に両立不可能である」⁽¹⁶⁾といえる。

以上がヒンティッカの解決である。

2-2. 色関数による解決の妥当性

しかし、色関数による解決は、色排除問題に対するウィトゲンシュタインの解決なのだろうか。

ウィトゲンシュタインが右の解決を採っていたという、資料上の根拠は薄弱である。こ

れは、ヒンティッカ自身も認めるところである「しかし、歴史的眞実は、ウィトゲンシュタインは色の写像分析を詳しく説明しなかった、ということに思える」⁽¹⁷⁾。

さらに、色関数による解決が十分なものであるかも、検討の余地がある。確かに、色の両立不可能性を関数的に変換できることはヒンティッカにより示された。しかし、そこからさらに、真理関数的矛盾に変換できることは、示されていない。ヒンティッカ自身も認めるように、「ウィトゲンシュタインにとっての矛盾は、真理関数論という考えによって、正確に定義づけられている (4.46) ……」⁽¹⁸⁾のだから、ウィトゲンシュタインに混乱がない限り、「矛盾」とは真理関数的矛盾でなければならない。真理関数的矛盾に変換できることまで示されなければ、ヒンティッカの解決にとっては不充分であろう。それゆえ、「これは、その当時のウィトゲンシュタインの問題であったが、しかし、われわれの問題ではない」⁽¹⁹⁾とは言えないように思われる⁽²⁰⁾。

以上より、色関数解決は、ありえない解決とはいえないが、ウィトゲンシュタインの解決として十分であるかどうかは、疑わしい。

3. それではどう考えるべきか——あるいは、色排除問題の「解消」

私の提出したい代案とは、①『論考』には、本来「矛盾」と呼ばれるべき真理関数的矛盾と、対象の形式の1つである色の論理形式により生じる色の相互排除——いわば、色矛盾、の2つがある。②ウィトゲンシュタインが両者を混同し、色の相互排除も「矛盾」としてしまったにすぎない。結論としては、『論考』のウィトゲンシュタインにとっては色排除問題は生じておらず、色排除問題は『論考』の対象が現象であるという見解を否定する論拠にはならない（この意味で「解消」）、というものである。

3-1. 2つの「矛盾」

『論考』の矛盾は、真理関数的矛盾である。「第2の場合、命題は総ての真理可能性に対して偽となる。その真理条件は矛盾である。……第2の場合、その命題は矛盾 [Kontradiktion] と呼ばれる」⁽²¹⁾。

『論考』における本来的な「矛盾」の定義は次のような場合である。すなわち、真理表において、各要素命題の真／偽に関わらず、恒に命題が偽となる場合である（下の真理表参照。略式の表記では、(偽偽偽偽) (p, q) と表される。

p	q	
T	T	F
F	T	F
T	F	F
F	F	F

対象の形式とは、事態において対象がどのようなしかたで結合しうるか、事態の構造の可能性である（2.031-2.033 参照）。そして、対象の形式として、色も挙げられている。「空間、時間、色（有色性）は、対象の形式 [Formen der Gegenstände] である」⁽²²⁾。

このため、「この斑点は赤い」といった、色についての事態は、色という対象の形式により規制されていることになる。像は写像のために、現実と形式を共有しなければならないが（2.1 以下）、その形式は対象の形式に他ならない（2.023 「この不変の形式は、まさに対象からできている」）。なお、用語法上の問題であるが、対象の形式を、ウィトゲンシュタインは論理形式と呼んでいる（2.0233 参照）。

ゆえに、「この斑点は赤く、かつ、緑だ」は、対象の形式の 1 つである色の論理形式によって、排除されていると考えられる。6.3751 本文第 1 パラグラフの「色の論理的構造によって排除されている」という記述が、このことを示している。

例えば、2つの色が同時に視野の 1つの場所にあることは、不可能、しかも論理的に不可能である。というのは、それは色の論理的構造によって排除されているからである。

このような矛盾が、物理学においてどのように描出されるか、考えてみよう。おおよそ、以下のようなものであろう。1つの粒子は、同じ時刻に、2つの速度をもつことはできない。すなわち、それは、同じ時刻に、2つの場所にあることはできない。すなわち、1つの時刻に、異なった場所にある点は、同一ではありえない。

（2つの要素命題の論理積がトートロジーでも矛盾でもありえないことは、あきらかである。視野のある点が、同じ時刻に、2つの異なった色をもつ、という言明は、矛盾である。）⁽²³⁾

そして問題の括弧書き第 2 文は、第 1 パラグラフと対照すると、同じく色の両立不可能性を述べており、括弧書きの「矛盾」は「色の論理形式により不可能である」ということを意味している。つまり、いわば「色矛盾」なのである。より一般的に言えば、「対象の形式による矛盾」なのである。

6.3751 括弧書きの「矛盾」が、真理関数的矛盾ではなく、色の論理形式による排除（色

矛盾)を意味するに過ぎなければ、色排除問題は何ら対象＝現象(センスデータ)説に対する批判にならない。本論 1-2 の図式を利用して書けば、

①要素命題の相互独立性により、 $R(a) \wedge G(a)$ は真理関数的矛盾ではない。

②色の両立不可能性すなわち、 $R(a) \wedge G(a)$ は色の論理形式により排除される。

この2つの間には、何ら衝突は生じていない。そもそも、問題点が生じないのである。

この意味で、色排除問題は、『論考』の対象がセンスデータであるか、という論点に関する限り、何ら問題ではなく、解決——というより、解消——される。

『論考』に2つの「矛盾」が存在するということは奇妙に見えるかもしれない。しかし、これは『論考』に2つの「論理」があることに対応するとも考えられる。真理関数論という論理による、『論考』の本来的な「矛盾」と、像の理論という論理において、写像形式として働く対象の形式による、「対象の形式による矛盾」(e.g.色矛盾)である。

3-2. ウィトゲンシュタインは2つの「矛盾」を混同していたか

『論考』に、本来的な矛盾である真理関数的矛盾と、色の論理形式による両立不可能性にすぎない「色矛盾」があるとして、ウィトゲンシュタインは本当にそれらを混同していたと言えるのだろうか。もし混同していなければ、明らかな混同を放置していたのでもないかぎり、やはりウィトゲンシュタインはなんらかの解決を考えていたか、あるいは対象＝現象説を採っていなかったことになる。

『論考』から挙げられる根拠は、要素命題の相互独立性を主張する 4.211 そのものに見出される「要素命題の目印は、いかなる要素命題もそれと矛盾 [Widerspruch] しえない、ということである」。

注目したいのは、4.211 の「矛盾」が、‘Kontradiktion’ではなく、‘Widerspruch’であることである。通常ならば、どちらも「矛盾」と訳される。しかし、要素命題の相互独立性を述べた 4.211 では、『論考』の本来的な矛盾である真理関数的矛盾を意味する‘Kontradiktion’を用いなければならないはずである。にもかかわらず、ウィトゲンシュタインが両者を混用しているのは、真理関数的矛盾と、それとは異なる矛盾(例えば、色矛盾)を混同している可能性を示唆している。4.211 とちょうど逆に、6.3751 では‘Widerspruch’というべきところを、‘Kontradiktion’と言っているのではないか。

このような事情ではないか、と伺わせる箇所が、『論理形式について』にある。

分析不可能な度合陳述の相互排除は、数年前に私が出版した、原子命題は互いに排除しえないということを要求する、意見と矛盾する。ここで私は慎重に「排除する [exclude]」と言い、「矛盾する [contradict]」とは言わない。というのは、これら 2 つの概念 [notion] には相異があるし、原子命題は、矛盾することはできないが、相互に排除することはできるからである⁽²⁴⁾。

この部分から、3つのことが読み取れる。

1つは、右のウィトゲンシュタインの後ろめたそうな発言は、実のところ、数年前に出版された意見、つまり『論考』においては、「排除する」と「矛盾する」を混同していた、ということを示唆している。排除と矛盾、つまりは、排除にすぎない色矛盾と、本来的な矛盾である論理矛盾を混同していた、ということである。

2つは、要素命題（の積）が、真理関数的矛盾にはならないが、色排除になる場合を認めていることである（引用最後の部分）。もちろんこれは、色命題は、『論考』の本来的な意味では矛盾（真理関数的矛盾）しないが、相互排除（色矛盾）する、という私見を支持するものである。

3つは、このような、ことさら「矛盾」から「排除」を区別する言及があること自体、ウィトゲンシュタインが自らの混同に気づき、その修正を図った、一場面と言える、ということである（引用最初の部分）。

ウィトゲンシュタインが、『論考』後『論理形式について』前に、自らの混同に気付いたことを示唆する箇所は、もう 1 つある。

……「 $RPT \wedge RPT$ 」がある種の矛盾である（単なる偽の命題ではなく）ということ
は、ここではわれわれのほとんどにとって、そして日常生活においてはわれわれすべて
にとって、明らかであろう⁽²⁵⁾。

6.3751 では、何のためらいもなく「視野における一点が同時に二つの異なった色をもつ、
という言明は、矛盾である」（強調は引用者）と言い切っている。両者を比較すれば、「 $RPT \wedge BPT$ 」が、本来的な意味での「矛盾」——真理関数的矛盾——ではなく、「ある種の矛盾」——いわば色矛盾——にすぎない、と気がついたために、『論理形式について』では、偽なる命題ではないが、本来的な意味でも矛盾と言いがたい、「ある種の矛盾」にトーンダウンしているのではないか。

3-3. ウィトゲンシュタインはなぜ混同したか

私見に対しては、色矛盾を（論理）矛盾と混同するなどという素朴極まりないミスが本
当にあったのか、という批判が考えられる。これは、『論考』6.3751 が置かれた文脈を検討
することが有用である。6.3751 は、6.375 の注釈とされる命題であり、6.375 は 6.37 の注釈
とされる。

6.375 論理的必然性のみが存在するのと同様に、論理的不可能性のみが存在する。

6.37 あることが生じたので、べつのことが生じなければならないような強制は存在し
ない。論理的必然性のみが存在する。

6.37 では、論理的必然性と、因果性⁽²⁶⁾、すなわち、「物理的」⁽²⁷⁾必然性が対比されてい
る。これを受けて、6.375 では、論理的不可能性と物理的不可能性が対比されている。物理
的不可能性と対比されれば、色形式のような対象の形式も真理関数的矛盾も同じ「論理的不
可能性」の側に属する。そのため、真理関数的矛盾ではないにもかかわらず、色形式によ
って（物理的によってではなく）「論理的に不可能」⁽²⁸⁾な、色の両立不可能性は、本来的
な「矛盾」すなわち真理関数的矛盾と混同されてしまったのである。このように考えれば、
問題となっている混同もあながちありえないことではない⁽²⁹⁾。

4. まとめと帰結

ウィトゲンシュタインは『論考』において、色矛盾（色の両立不可能性）を、本来的な
意味での矛盾（真理関数的矛盾）ではないにもかかわらず、「矛盾」と表現してしまってい
た。『論理形式について』に先立つ時期において、これに気付き、「ある種の矛盾」とト
ーンダウンするとともに、色の両立不可能性を真理関数的矛盾と構成する方法を求め、度合
による解決も考慮したかもしれない。

しかし、結局は2つの「矛盾」——『論考』の本来的な真理関数的矛盾と、対象（例
えば色）の論理形式による「ある種の矛盾」の2つがあるということ、色の両立不可能性は
後者によるものであることを、ウィトゲンシュタインは正面から認めざるをえなくなった
と考えられる。

私は他のところで『論考』2.1511 命題は「現実には達している」と言ったことがあ
る。そしてこれによって私が言おうとしたのは、存在者の形式は、これらの存在者につ
いての命題の形式に含まれている、ということである。……私が思うに、この見解はRPT

とBPTの相互排除の説明にカギを与える。というのは、命題が、それが関わる存在者の形式を含んでいるなら、2つの命題がほかならぬこの形式において衝突する、ということが可能だからである⁽³⁰⁾。

そして、色の両立不可能性が、真理関数的矛盾ではなく、色の論理形式による排除であると認めることは、『論考』にとって致命的である。2つの色が同時刻に視野の同じ場所にあるという命題が矛盾である、というとき、真理表では、(偽偽偽偽) (RPT、BPT)⁽³¹⁾と書かれなければならないである。ところが、色の論理形式による排除を認めると、RPTとBPTがともに真であることはありえず、次のように書かざるをえなくなる⁽³²⁾。

p	q	
F	T	F
T	F	F
F	F	F

つまり、真理表が一段欠落し、論理空間がうまく形成できなくなる。いわば、対象の論理形式という像の理論と、真理関数論が衝突した形になる。『論理形式について』では、ウィトゲンシュタインはなお「完全な表記法」⁽³³⁾による衝突回避を図っているが、それは「いまだ達成されていない」⁽³⁴⁾し、結局達成されていない。

結局、色排除問題に『論考』後のウィトゲンシュタインが気付いたことにより、彼は、真理関数論を放棄するに至るとともに、問題を引き起こした色の論理形式を考察していくことになったのではないか。『考察』が視野の点の色についての考察をしばしば行っているのは、そのためであるように思われる⁽³⁵⁾。

註

(1) 参考文献およびその略号は最終ページに掲げる。なお、『論考』からの引用・参照のみ、略号抜きで、引用箇所の命題番号のみを示す。

(2) 本論文では、現象、直接経験、センスデータはとくに区別せずに論じる。対象を現象とみなすウィトゲンシュタインの立場は、ラッセルから継承したものである。現象 etc. はすべて見知りの対象のことである。このような前提に立っている。See.IW p51ff、とくにp55「したがって、われわれには、『論考』において指定されたウィトゲンシュタインの対象が、ラッセルの見知りの対象のクラス(i)と一致する、と考える重大な理由がある」。

(3) 5.134、4.211 参照

(4) 6.3751 参照

(5) 2.0271 参照

(6) 『草稿』 1915. 6. 16

- (7) 5.5561 強調は引用者
- (8) 『考察』 § 1 強調は引用者
- (9) 『考察』 編者あとがき
- (10) ここでいう、色排除問題とは、対象がセンスデータであるか否かをめぐって、指摘されたものである。
- (11) *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus* p25ff
- (12) *ibid.* p27
- (13) IW pp121-122
- (14) IW p123
- (15) *ibid.*
- (16) *ibid.*
- (17) IW p124
- (18) IW p122
- (19) IW p127
- (20) ヒンティッカが真理関数的矛盾に至らなくても十分であると考えた背景には、原子命題間の論理的従属は、唯一の必然性は論理的必然性だけであり、それは論理形式から見て取られるものである、というウィトゲンシュタインの一般原理との抵触がより深刻である、と考えたことがあるのかもしれない。(IW p 116 参照) ヒンティッカの解決は、こちらには成功しているが、真理関数的矛盾に変換できるか、というよりありふれた側面についてはうまくいっていない。ヒンティッカは、この側面からの反論に対して周到に再反論を準備している。「……真理関数的従属はウィトゲンシュタインにとって論理関係の岩盤層をなしてはいない」(p127)。しかし、この再反論は、ウィトゲンシュタインの矛盾が真理関数的矛盾であると主張している p122 の記述との整合性に欠けるように思われる。
- (21) 4.46
- (22) 2.0251
- (23) 6.3751
- (24) 『論理形式について』 p35
- (25) 『論理形式について』 p35 強調は引用者
- (26) 6.32 以下、6.3751 以下参照
- (27) 6.374 参照
- (28) 6.3751 第 1 パラグラフ
- (29) 6.3751 を、物理的必然性 v.s. 論理的必然性という文脈で考えれば、6.3751 第 2 パラグラフは、色の両立不可能性を物理学によって、つまり物理的不可能性によって説明しようとしているのではないことは明らかである。第 1 パラグラフで、色の両立不可能性は「論理的に不可能」なのだと言っておきながら、それとまさに対置されているはずの物理的不可能性によって説明するとは、考えにくい。6.3751 第 2 パラグラフは、空間形式という、対象の形式による論理的不可能をアナロジーとして、色形式という対象の形式による論理的不可能性（真理関数的矛盾という論理的不可能性ではなく）を説明していると解釈するのが妥当に思われる。
- (30) 『論理形式について』 p36
- (31) 4.442 参照
- (32) 『論理形式について』 p36-37 参照
- (33) 『論理形式について』 p37
- (34) *ibid.*
- (35) 『考察』 § 76 以下、206 以下、218 以下など

参考文献・略号一覧

- Wittgenstein, L. *Tractatus logico-philosophicus* [1918] with a new edition of the trans. by D.F. Pears & B.F. McGuinness, Routledge and Kegan Paul, 1961, 1971 (『論考』)
- Wittgenstein, L. *Notebooks 1914-1916*, G.H. von Wright & G.E.M. Anscombe (eds.) with an English trans. by G.E.M. Anscombe, Basil Blackwell 1961, 1979 (『草稿』)
- Wittgenstein, L. 'Some Remarks on Logical Form' [1929] in *Essay on Wittgenstein's Tractatus* I.M. Copi &

R.W.Beard(eds.), Routledge and Kegan Paul, 1966 (『論理形式について』)

Wittgenstein, L. *Philosophische Bemerkungen* [1929-1930] Aus dem Nachlaß hrsg.von R.Rhees, Basil Blackwell, 1964
(『考察』)

Anscombe, G.E.M. *An introduction to Wittgenstein's Tractatus*, Hutchinson, 1959

Hintikka, Merrill B. & Jaakko. *Investigating Wittgenstein*, Basil Blackwell, 1986 (' IW ')

Monk, Ray. *Ludwig Wittgenstein The Duty of Genius*, Jonathan Cape Ltd.1990